

奈良県に適した醸造用ブドウの品種および栽培地

～奈良県産ワインの振興を目指して～

県産ワインの振興を目的として、原料となる醸造用ブドウの試験栽培を実施しました（主要3品種、県内3地点）。その結果、品種としては‘メルロー’および‘シャルドネ’が適しており、栽培地としては標高350m前後の場所が適していると考えられました。

1. 背景と目的

近年、全国的に地場産ワインへの関心が高まりつつあり、2022年には県内初となるワイナリーが誕生しました。しかし、醸造用ブドウの県内栽培事例は少なく、どんな品種や栽培地が適しているのか、よく分かっていませんでした。

そこで、代表的な品種である‘シャルドネ’、‘メルロー’および‘カベルネ・ソーヴィニオン（以下CS）’について、標高の異なる県内3地点において試験栽培を実施しました（図1）。



試験栽培地点
・大和茶研究センター(奈良市:標高約430m)
・大和野菜研究センター(宇陀市:標高約350m)
・果樹・薬草研究センター(五條市:標高約225m)

図1 供試品種および試験栽培地点

2. 研究成果の概要

2019年に苗を定植し、2020年から果実が収穫できるようになりましたが、2021年にはべと病が大発生し、収量が大きく減りました。そこで、2022年からは萌芽期からの早期防除を徹底したところ、以降は収量が増加し、安定生産にはべと病防除の徹底が重要であることが分かりました（図2）。

‘CS’は他品種と比べて収量が少なく、酸度が適正範囲より高くなったことから、栽培適性が低いと考えられました。一方、‘シャルドネ’と‘メルロー’は適性があると考えられました（図3）。

また、高標高では小粒化による収量減、糖度

向上の傾向があり、低標高では糖度低下の傾向がありました。このことから、標高350m前後の中庸な地点が収量と品質のバランスが良く、栽培に適していると考えられました（図3）。

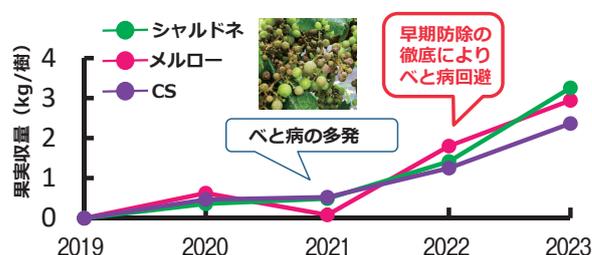
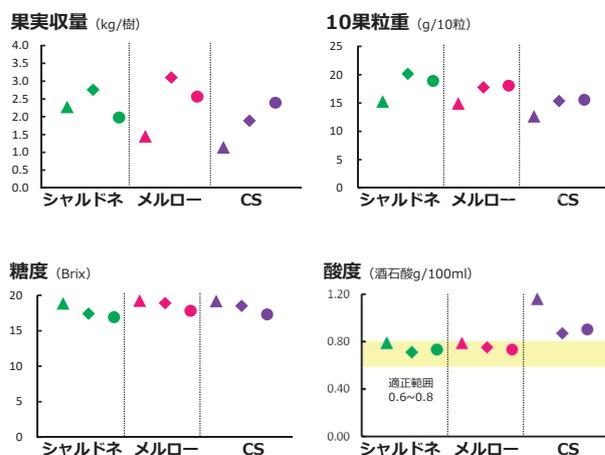


図2 果実収量の推移



- ▲ 大和茶研究センター
- ◆ 大和野菜研究センター
- 果樹・薬草研究センター

図3 果実収量および品質（2022、2023年平均）

3. 実用化に向けた対応

醸造用ブドウ栽培暦を作成し、ホームページ上で公開しています。栽培拡大の際の資料として活用されることを期待しています。

（果樹・薬草研究センター 米田健一）